



自治体職員協力交流事業研修員とともに考える 多文化共生への取り組み

豊橋市市民協創部多文化共生・国際課 原田 未彩

自治体職員協力交流事業研修員 受入れの背景

豊橋市には、1万4,639人の外国籍市民が在住しており（平成28年11月30日現在）、その約44%をブラジル人市民が、約20%をフィリピン人市民が占めています。ブラジル人市民がリーマンショック後に激減した一方で、フィリピン人市民は近年増加傾向にあります。

本市ではこれまで主にブラジル人向けサービスの強化を進めていましたが、フィリピン人人口の増加に伴い、フィリピン人向けサービスの充実が求められるようになりました。しかし、フィリピン人市民が日頃抱える問題は、ブラジル人市民が抱える問題に比べると表面化しておらず、私たち行政はフィリピン人市民のニーズを把握しきれていない状況にあります。

こうした現状から、本市では、平成19年度より教育分野で受入れてきたブラジルからの研修員に加え、平成28年度よりフィリピンからも研修員を1名、フィリピン国内でも多民族の暮らす「るつぼ」と呼ばれているタルラック州の州都タルラック市より、多文化共生分野で受け入れることにいたしました。

研修員仲間が与える影響

平成28年6月中旬、フィリピン人研修員がブラジル人研修員とともに豊橋に到着しました。まずは、これから始まる5か月間の研修に備え、生活日用品や食料の買い出しを行いました。5月から1か月間続いたJIAMでの日本語研修を通じて、2名の研修員は仲良くなっており、リラックスした雰囲気の中、出身国と日本の文化の違い一つ一つに、感嘆の声をあげていました。

楽しそうに買い物をする2人を見て、1つの自治体で研修員を2名以上受け入れることは、研修員の精神状態の安定に大変重要なことであると実感しました。特に研修のはじめは、親しい人がおらず、担当職員以外話

をする相手がないこともしばしばで、こうした状態が研修員のその後の研修への姿勢に大きく影響するのではないかと思います。

今回研修分野や研修場所は異なるものの、同時期に2名の研修員を受け入れたことで、研修員同士で週末市内を探索したり、市のイベントに積極的に参加してもらうことができました。

研修員の活動内容

豊橋市役所では、月曜日にタガログ語の通訳を任用していることから、月曜日には多くのフィリピン人市民が生活相談に市役所を訪れます。研修員の方には、こうしたフィリピン人市民の相談を通訳とともに聞いたり、行政文書のタガログ語通訳の翻訳補助をしてもらうことで、市役所がどのようなサービスを提供し、また彼らにとってどのような市政情報が不足しているのかを認識してもらいました。

また、フィリピン人集住地区の小・中学校を訪問し、各学校のフィリピン人児童生徒から直接話を聞くことで、彼らが日本での生活について何を思い、将来に対してどのような希望や不安を抱いているのかを知ることができました。多くのフィリピン人児童生徒は祖国での生活を懐かしんでおり、日本での自分の将来について前向きに考えることができずにいます。そんな彼らに自分の将来について考えてもらうため、児童生徒とその保護者に対して、研修員がキャリアについてのプレゼンテーションを行いました。

さらに、研修員は豊橋市内で開催されたさまざまな行事にも積極的に参加しました。

豊橋市は手筒花火発祥の地とされており、毎年7月には手筒花火の放揚で知られる祇園まつりが開催されます。研修員はダイナミックな手筒花火を間近で見学し、驚きの声を上げていました。

10月に開催された豊橋まつりでは、市内フィリピン人



市内中学校で外国人生徒と触れ合う研修員



フィリピン人市民の皆さんと参加した豊橋まつりの様子

協会のメンバーと共に総おどりに参加し、2万人以上の参加者とともに熱気に満ちあふれた踊りを披露しました。

本市のさまざまな行事に参加することで、研修員は国籍を問わず本市に暮らすたくさんの人と出会い、豊橋の文化を肌で感じる事ができたと思います。

これらの行事や日々の生活を通じて構築した人脈を生かし、研修終盤には市内フィリピン人市民を対象に市に対する意見や彼らが日々抱える問題等について問うアンケートを実施しました。市職員に向けての活動報告会では、豊橋市に在住するフィリピン人の現状やアンケート結果を発表するだけでなく、フィリピン人に対する職員の理解を深めるため、文化や風習を紹介することで、市職員の多文化共生に対する意識啓発を行うことができました。

成果と今後の課題

研修員は持ち前の明るさと笑顔を生かし、いつも前向きかつ積極的に研修に取り組んでくれました。5か月間という短い間ではありましたが、気がつけば本課の一員として欠かすことのできない存在になり、別れの時には本課の職員だけでなく、他課の職員や関係団体の方々が別れを惜しみました。

今年度は、フィリピン人研修員受入初年度であるにも関わらず、研修員が市内各地で自発的にネットワークを構築してくれたおかげで、フィリピン人市民対象アンケートの回収率は昨年度を上回り、これまで直接聞くことのできなかつたフィリピン人市民の声を聞くことがで

きました。

さらに、本市の多言語による行政サービスの提供や虹の架け橋教室などの取り組み、ゴミ分別など、多文化共生分野以外の施策についても、研修員は大変意欲的に学んでくれました。帰国後は、本市で学んだ知識を出身市の施策に生かしてくれることを願っています。

今後は、研修員がまとめてくれた報告書とアンケート結果を市役所内で周知するとともに、今後の行政サービスに生かしたいと思います。また、今年度の成果をもとに、来年度の自治体職員協力交流事業がさらに良いものとなるよう、研修内容を考えていきたいと思っています。